

特別対談

佐々総合病院 DMAT隊 佐々総合病院 院長
竹内俊介 田々井史郎 木村総司 鈴木隆文

新型コロナウイルス感染症によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔み申し上げますとともに罹患された方々には心よりお見舞い申し上げます。

当院はハード面などから院内での積極的治療を行っていませんが、専門分野を持つ職員が新型コロナウイルス対応の指導・協力に出動しています。今回は、今年2月に新型コロナウイルスのホットスポットとなった横浜港クルーズ船に当院DMAT隊が派遣された件について、鈴木院長が話を伺いました。



鈴木：改めて2月の横浜港クルーズ船派遣、本当にお疲れ様でした。突然新型コロナウイルスのホットスポットに行くことになりましたが、率直にどう感じましたか。

竹内：厚生労働省から派遣要請をいただいた時は、まず何を求められているか認識できなかったです。自分たちは地震などを想定した訓練の経験はありますが、「ウイルス」という訓練では想定していなかった脅威に対しての出動に不安はあつつも、出動することが社会貢献にも繋がると考え、院長に派遣の件を相談しました。

木村：私も最初チームで話し合った時は急で驚きました。地震などが発生した際は、要請以前から「行くことになるだろう」と考えますが、まさかクルーズ船に自分が行くとは思いませんでした。けれども、何か自分に手伝えることがあれば貢献したいという気持ちはありました。

田々井：通常の災害とは異なるので戸惑いはありましたが、DMATの他メンバーはもちろん、院長をはじめ病院全体が派遣に賛成してくれたことが出動する上で大きな後押しとなりました。

鈴木：現場で何をすべきか不安な反面、怖さもあつたと思います。それを乗り越えて現場に行ってくれたことが本当にありがたいと感じました。また

想定外の出動の中で日頃からの訓練に意味はありましたか。

木村：病院で実施している大規模災害訓練でも、本部を立ち上げて情報を集約しますが、その際に用いるクロノロジーが院内訓練と同じ記載方法だったので、記録担当になった際も速やかに対応できました。日頃の訓練が活かされたことで訓練の必要性を改めて感じました。

竹内：派遣された段階では、コロナウイルスは今以上に感染の仕方や感染力などに不明な点が多く、現場に入る自分たちもウイルスに関する情報がほとんど解らない状態でした。しかし、そのような状況下であっても、一緒に行く隊員を感染させる訳にはいきません。幸い、私は感染対策に長いこと携わっており、ICD※2を持っているので、DMATとしての立場と感染対策をやってきた経験を組み合わせ、少ない時間の中で防御策を考えて現場に行けたことは非常に良かったと思います。

鈴木：続けて現場で担当した役割についても話を聞かせてください。

木村：現地に行くと、「船内に入り患者対応するチーム」と「患者さんを病院に搬送するチーム」のどちらかを担当していただきました。



医師 竹内俊介

佐々総合病院 救急・災害部部长。専門は外科・消化器外科。日本DMAT隊員の他、西東京災害医療コーディネーターも務める。

看護師 田々井史郎

佐々総合病院 看護師。日本DMAT隊員。

業務調整員 木村総司

佐々総合病院 薬剤師。日本DMAT隊員。

【DMAT(ディーマット Disaster Medical Assistance Team)とは?】

医師、看護師、業務調整員(医師・看護師以外の医療職及び事務職員)で構成され、災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた災害医療チームを意味します。

田々井：選択制ではなく割り振られる形で、私たちのチームは患者さんを病院に搬送する業務を担当しました。派遣にあたり感染防止対策室の皆さんの十分なバックアップもあり、幸いにもメンバー全員感染することなく活動できました。

竹内：当時は「ちょっと重装備かな」というほど感染対策をしていきましたが、後になってウイルスの感染威力がかなり強いことが分かってきたので、今振り返るとリスクを考えて重装備で行って良かったなと思いますね。

鈴木：クルーズ船から感染者3名を関東地区内の2病院に搬送したと聞きました。本当にお疲れ様でした。そして良い機会なのでもう1つ。今年度から新設した救急・災害部の部長を竹内医師にお願いしていますが、最初に取り組みたいことを教えてください。

竹内：普段の救急医療をやっていく上でも、災害拠点病院として災害が起きた際にも、職員1人1人が自分がどう動く必要があるかを考えられる環境づくりをしたいと思います。例えば今後は、夜間での災害を想定した訓練など、今まで以上にハードルを上げた訓練も取り入れていくつもりです。

鈴木：災害に関しては、このメンバー以外にも、担当できる人材を増やしていきたいと考えています。もう1つは新型コロナウイルスについてで、当院はハードを含めた様々な事情から積極的な診

察をすることはできませんが、他院が新型コロナウイルス対応で診れなくなった患者さんの救急受け入れを積極的に行っていくことで、当院の役割を果たしていきたいと考えています。

田々井：お話を伺う中で、災害や救急に対して積極的でない病院もある中で、救急・災害部門を設立していただけたことは、自分たちの頑張りや職員の姿勢を評価してもらえた所もあると思うと、非常に励みになります。

鈴木：今回のクルーズ船派遣での働きが評価され厚生労働省から感謝状をいただき、TMGからも功労者表彰される運びとなりました。今後とも皆さんには災害医療の最先端に立ち、佐々総合病院の職員を先導する活躍を期待しています。今回はありがとうございました。

3名：ありがとうございました。(以上)

最後になりましたが今回のクルーズ船派遣にあたり出動を後押ししてくれた、みなさまに感謝申し上げます。

佐々総合病院DMAT隊一同

厚生労働省DMAT事務局より
いただいた感謝状



※1…クロノロジー (chronology) / 災害時に発生した出来事を時系列順に記載する。

※2…ICD (Infection Control Doctor) / 感染症や感染制御、院内感染対策を専門に取り扱う医療従事者。